

二〇一四年度

第二回 全統記述模試問題

国語

二〇一四年八月実施

現・古・漢型 一〇〇分
現・古型 一〇〇分
〔現代文型〕 八〇分

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、問題冊子は29ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(解答用紙冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出ること。
- 四、左表のような「問題選択型」が用意されているので、志望する大学・学部・学科の出題範囲・科目にあわせて、選択型を選んで解答すること。出題範囲にあわない型を選択した場合には、志望校に対する判定が正しく出ないことがあるので注意すること。

選 択 型		問 題 番 号
1	現代文・古文・漢文型	㊦ ㊧ ㊨ ㊩
2	現代文・古文型	㊦ ㊧ ㊨ ㊩
3	現代文型	㊦ ㊧ ㊨ ㊩

解答すべき問題数は、現代文・古文・漢文型及び現代文・古文型はいずれも4問、現代文型が3問である。

- 五、試験開始の合図で解答用紙冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に**選択型・氏名・在・卒・高校名・クラス名・出席番号・受験番号・受験票の発行を受けている場合のみ**を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 六、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。解答欄外に記入された解答部分は、採点対象外となる。
- 七、試験終了の合図で右記五、の項目を再度確認すること。

ク ラ ス		受験番号	
出席番号		氏 名	



【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

フランスの作家パスカル・キニヤールは、アウシュヴィッツについて、「音楽は、あらゆる芸術の中で、ドイツ人が一九三三年から一九四五年にかけてクワダ^aでたユダヤ人虐殺に協力した唯一のものである。強制収容所の管理者たちにそのような形で求められた唯一の芸術である。この芸術にとっては不名誉ではあれ、強調せねばならないが、音楽は、収容所の成り立ちと折り合いをつけ、飢えと貧窮と労働と苦痛とオジ^bョクと、そして死とも、折り合いをつけることのできた唯一の芸術である」と断じている。そう、大量虐殺が行われている強制絶滅収容所において、実は、囚人からなる楽団が設置され、日々、音楽が演奏され、聴かれていたのだ。

これは要するに、自由のない空間からなおいっそう自由を奪うべくなされていた音楽活動である。規則正しいリズムを刻む行進曲が演奏されることで、囚人たちの動きに画一性が与えられ、彼らからは意識や思考が奪い去られ、身体が無意識的に動かされるからだ。化学の知識をもっていたおかげで、アウシュヴィッツの中でも比較的生存率の高かったアウシュヴィッツⅢに収容され、生還できたブリーモ・レーヴィは、そうした収容所内の音楽にかんして次のように記している。「曲の種類は少ない。一ダースほどだ。朝と晩、毎日同じ曲が演奏される。ドイツ人にはみなおなじみのマーチや流行情だ。……この音楽が聞こえ出すと、霧の深い広場で、仲間たちが、自動人形のように行進し始めるのがわかる。彼らの魂は死んでいる」。音楽隊に属さない囚人からすれば、楽団の奏でる音楽は、死へと向かうリズムを刻むものにほかならない。ここでは、音楽は鑑賞されるものでも、ましてや癒しをもたらすものでもないし、音楽の A 性格はまったく見られない。何が演奏されているようと歌われているようと、これは、人々を交流させるところか、人々を断絶させ、人々から思想や感情といった内面を奪ったための、道具としての音楽である。だが、音楽の力は、たとえ非人間的な目的に

したがって道具として用いられるときでも、ナチスの意図から外れて、道具であることだけに留まったわけではない。

演奏者にとって、アウシュヴィッツで音楽を演奏することは、自らの生存確率を

B

に高めるだけではなく、お

のれの尊厳を保つという精神的な作用をもたらししていた。ラスカー・ウォルフ・フィッシュは、「たしかに私は名前を失ったが、他の人となんらかのつながりがあり、チェロ奏者として、悲惨な、名前を失い、その身元さえも確認できそうもない群衆の中に完全には溶け込まずにすんだのである」と振り返っている。自身の音楽活動によつてはじめて、彼女は、囚人であるにもかかわらず、自分が強制絶滅収容所においても人間らしく存在し続けることができた、というわけだ。そうして「自動人形」にならずに済んだ彼ら楽団員たちの間では、自分たちが置かれた状況にかんして **C** な議論が交わされ、いささかなりとも人間的な交流が可能となっていたのだった。

しかも、彼らの演奏する音楽によつて人間性を取り戻すようになるのは、楽団員に限られなかった。ラックスは、収容所のSSたち^(注1)が、音楽によつて人間性を回復するかに見える様について、「SSは、音楽に耳を傾けると、それも特にお気に入りの音楽を聴くときには、奇妙なことに、人間存在に似始める。その声からはいつもの乱暴さが消え、彼自身、突如として愛すべき人物となり、こちらからもほとんど対等に話することができるのだ」と描いている。囚人たちをガス室に送るか労働させるか選別したばかりのSSは、楽団の演奏するシューマンを聴いて涙を流す。自分たちの奏でる音楽によつて、目の前のSS、すなわち囚人たちを自分と同類ではない人間ならざるものとして処分しようとしていたSSは、囚人の立場から見ても、ようやく人間らしい顔を呈し始めるのである。ここには、囚人に相対する場合とは逆に、音楽が、聴衆に愉楽をもたらし、まるで、囚人である演奏家と、彼らからは隔絶せんとしているSSとの間の交流を可能とするかのごときものとして享受されている様が見られる。音楽は、それが人々を分離する道具として用いられる強制絶滅収容所においてさえ、なおも人々——とはいえ殺されてしまう囚人から切り離された人々に限られるが——を交流させ、つなぐ力をもっていたのである。

しかしながら、収容所での音楽活動は、音楽家にとってもまた、単に、物心両面で自分の人間性を失わずにいられる力であっただけではなく、たいへん慍^{ぐん}懣たるものでもあった。なぜなら、ガス室で殺され火葬場で焼かれる人が多ければ多いほど、収容所ではそれだけ食べ物も増え、その分だけ彼らの荷物や衣類が音楽家たちの手に入るのだから。これは、自分たちの演奏活動によって、本来は自分たちと立場をコト^cにするものではない、聴衆ならざる聴衆（彼らは好き好んで音楽を耳にするわけではない）としての囚人たちの死を早めるばかりではなく、まさに彼らの死を早めることが自分たちの生存の可能性を少しでも高めることを意味するという、二重の意味で人々を断絶させる音楽活動である。ここには、音楽のもたらす、演奏家と聴衆との間の交流など微塵^{みじん}もない。絶望的な状況だ。

この状況を、音楽家たちはいったいどうやってやり過ごしたのだろうか？ どうやらそれは、自身の音楽に熱中することによってなのだ。ラックスは、自分たちの演奏の様子を奇妙なほど冷静に観察している。「私は、日曜午後に行われていたコンサートの一つを思い出す。私たちは、ドイツのオペレッタの序曲をやっていた。……ドクター・メナシェは、靈感を得たかのように演奏し、アリアを見事に演奏しようとヤッキ^dになっていたので、女性たちを載せたトラックの長い列が通りすぎ、火葬場に向かってすばやく走り去っていくのにも気がつかなかった。……このトラックの中には、彼の娘もいたのだった」。心ならずも、他の人々の思考能力を打ち砕いて破滅へと向かわせ、結果として自らの生存確率を高めている音楽家たち。若干出来すぎにも思われるイツワだが、ともあれ、彼らがこの状況を乗り越えるのが、音楽に没頭することによってなのだということは窺い知られるだろう。収容所の音楽家たちは、そうすることによってのみ、眼前の現実を見ないで済んでいるのだ。彼らが物理的にも精神的にもおのれの尊厳を維持できたのは、単に、自らの延命やSSの慰みのために命じられた演奏活動によるだけではなく、音楽そのものとの交流、つまり音楽への没我によって、現実を飛び越えることができたからでもある。音楽はここにおいて、図らずも、もろ刃の剣として存在したことになる。他人をコントロールするための道具として徹底的に用いられようとするときでさえ、音楽は、道具としての役割に留まらず、新たな交

流をもたらした。それは犠牲²の上に成り立つ交流だったけれども。

音楽の力のこの両面性は、収容所で死んでいった人々にとつての音楽において究極的な形をとつて現れる。アウシュヴィッツIIの中で特別労務班として死体処理などに従事することで生き延びたスロヴァキアのユダヤ人フィリップ・ミュラーは、ガス室の前で囚人たちを裸にせねばならなかったときのことを、インタヴューで次のように報告している。「ほとんどの人が、『脱衣せよという』この命令を拒否しました。そして、突然、合唱がわき起こったのです。合唱の声が……。はじまった歌声は、脱衣場の隅ずみにまで満ちあふれました。チェコの国歌が、それから、ハティクヴァ^(注2)〔シオニズムの賛美歌で、後のイスラエル国歌〕が響きわたりました。私は、身もふるえんばかりに、感動しました。この……。だめだ。やめましょう!」。おのれの死に直面した人々から自然に発生した歌声が、彼らを心ならずも見送ることになる人——この人もまた、死にゆく人々を見送ることによって生き延びるという絶望的な状況に置かれている——を感動させてしまうという事実。ガス室を前にした囚人たちは、いったい何のために歌ったのか。そもそもその歌声に何か目的があったのかどうかわからない。わかるのはただ、そこでは **D** に歌——それも普段は人々を集結させる国歌——が歌われたということ、そしてそれがミユラーを感動させたということだけである。だが、音楽がまるで文化的な意味をもたない死の工場において、人を支配する道具としてSSに必要とされたときでも、音楽は同時に、絶望的な状況における延命や尊厳維持の方策としても、そして、虐殺を前にして、死すべき者たちから見送る者への図らずもの交流を生み出す力としても、必然的に生じたのだということを理解するには、これだけですでに十分ではないだろうか。

（安原伸一朗「芸術は人と人をつなぐのか？」）

(注) 1 SS……Schutzstaffel（ナチスの親衛隊）の略称。絶滅収容所などを通じてユダヤ人の抹殺を図ろうとした。

2 シオニズム……シオン（エルサレムのある丘）を中心とした地に祖国を回復しようとするユダヤ人の運動。

問一 傍線部 a i e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

イ

D

に入れるのに最も適当な語句を、次のア i オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 自発的 イ 歴史的 ウ 客観的 エ 物理的 オ 文化的

問三 傍線部 1 「人々——とはいえ殺されてしまう囚人から切り離された人々に限られるが——を交流させ、つなぐ力をもっていた」とあるが、どういうことか。百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部 2 「犠牲の上に成り立つ交流」とあるが、ここではどのようなことか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部3「囚らずもの交流」とあるが、ここではどういうことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 死を前にした囚人の一人が突然歌い出した国歌が、他の囚人たちへと自然に拡大し、彼らを一つに結ぶ合唱になったということ。

イ 人々を集結させる力を持つ国歌の合唱が、囚人内部での立場の差を超えて、人々の間に一体感をもたらしたということ。

ウ 他の囚人を死に向かわせることで生き延びる者たちが、死に直面した者たちの自然に歌い出した歌によって感動したということ。

エ 皆で声を合わせて歌うことからもたらされる音楽の力が、国家という単位を超えて人々を結びつけたということ。

オ 死に向かわされた囚人たちが一斉に声を合わせて歌った歌声の中に、他の囚人たちが命令への拒否の意志を読み取ったということ。

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 強制収容所の中でユダヤ人が虐殺を免れるためには、音楽のたしなみがあることが必須だった。

イ 音楽は強制収容所の中で人から思想や感情を奪うばかりでなく、人と人をつなぐ道具としても用いられた。

ウ 音楽という芸術は、収容所内でユダヤ人虐殺に荷担しつつも、同時にユダヤ人を救いもした。

エ 囚人の中の音楽家たちは、自分たちだけが助かるのでなく他の囚人たちを助ける道を模索すべきであった。

オ 音楽家たちは、自分たちの間ばかりでなく、SSや死に向かう同胞たちとも音楽を通じて関わろうとした。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、文中の「科学コミュニケーション」とは科学の専門家と非専門家をつなぐためのコミュニケーションを意味する。（配点 四十点）

現代ほど、人々が科学技術の生み出したものに囲まれて生きている時代はありません。しかし、歴史上、科学技術と人々との心理的距離感が最も近かったのは、十八世紀であったでしょう。

専門家と素人の境界も実にあいまいでした。英国のルナー・ソサエティは科学を議論するための交流団体でしたが、そのメンバーは陶磁器のジョサイア・ウェッジウッド、蒸気機関のジェームズ・ワット、後に米国の政治家となるベンジャミン・フランクリンなど、現代の学問の世界に比べれば、はるかに多様な人たちが集まっていました。

一方、科学者の側にも詩人に影響を与えるほどの多才な人物がいました。ルナー・ソサエティの創設者で医師のエラズマス・ダーウィンです。チャールズ・ダーウィンの祖父に当たるエラズマスは、孫に先がけて生物進化論を唱えていたほどの人物でした。エラズマスの詩は英国の多くの詩人に影響を与え、詩人のコールリッジやワーズワスは彼を「超えなければならぬ高い壁」だと認識していました。

しかし、こうした幸せな時代は十八世紀とともに終わりを告げ、科学は徐々に職業科学者の専有物となり、素人は排除され、科学と一般人は心理的にも離れていきました。

エラズマス・ダーウィンの扱われ方も印象的です。十九世紀、メアリー・シェリーは、エラズマスモデルに『フランケンシュタイン』、あるいは現代の『プロメテウス』を書きました。この小説は、生命をも解き明かせるのではと思われるほどの科学の力への賞賛とともに、科学と科学者の危険性をも描いていました。¹この時代、科学の力が過大に評価される一方、科学によって何が起こるかわからないという恐怖心も呼び起こされました。人々は工業の発展に目を見張りつつ

も、世の中の変化の速さに戸惑い、新しい技術への嫌悪感を拒めませんでした。科学技術とそれによって生みだされた産業革命は、一般市民にとってモンスターになりつつあったのです。

こうして、広い分野で活躍し、幅広い交遊を持ち、文人に影響を与えたエラズマスは、次の時代にはマッドサイエンティストのモデルとして描かれることになってしまいました。

このように、十九世紀には「文と理」「素人と専門家」の分裂が決定的になり、両者の考え方は対立しました。対立軸は「聖書に書いてあることと違う」といった知識に関すること以上に、世界観の違いが大きかったのです。

世界のどの地域でも、おそらく人類が最初に作り出したのは、神話的世界観でしょう。人間は社会的な生き物であり、人間の脳は人間の心とコミュニケーションするようになっていきます。だから人間は、世界を物理的に解釈するよりも、心を持った擬人的な存在として解釈する方が容易なのです。地殻のプレート移動によって蓄積された歪みのエネルギーが突発的に解放されて地震が起きると考えるよりも、大地の神の怒りが墮落した市民に鉄槌を下したのだと考える方が楽なのです。

神話的世界観では、神と人間が共存していました。それが、預言者宗教の登場とともに、神が中心の世界観になっていきました。そして、ルネサンスで人間が再び復活する。ところが、科学革命と、続く産業革命によって、世界観は物質中心の様相を呈してきたのです。これに対する反発が、欧州の「反科学」の根です。

科学は非人間的である、と反科学の側は感じています。人間中心の世界観を強く望んでいます。現代では、兵器開発、環境問題、遺伝子組換え、再生医療、脳科学などといったものの中に、メアリー・シェリーのモンスターを見て、怖れています。しかしながら、反科学の側の中心にいるのは人文の知性です。相手が知性なので、「対話」も十分に可能なのです。

そもそも、欧州は「対立と共存」の文化です。比較的狭い地域に、異なる民族、異なる宗教、異なる歴史が混在し、常に対立の火種を抱えていました。平和的に共存するためには、古くはローマ帝国、現代ではEUがそうしたように、多様

性を容認した上で統一を図る必要がありました。

X

が、欧州にはありません。対立と共存が同時に存在し、それが必然的に対話を必要としたのです。こうした対話が近代科学や近代文明を生み出したと言っても過言ではありません。

対話こそは欧州の伝統なのです。欧州においては反科学が存在し、科学と反科学の間にははっきりとした対立軸もあります。ゆえに、「対話型コミュニケーション」が欧州においては不可欠であり、きわめて有効なのです。

欧州が「対立と共存」の文化なら、日本は「受容と融合」の文化です。

お上からのお達しにしろ、外来文化にしろ、日本人は実にあっさりを受け入れます。これは、日本人の好奇心の強さと柔軟性によるものなのでしょう。受容というと、受け身で創造性に欠けるように思えますが、それをみごとに現存のものと融合させるところに日本人の独自性があります。

ゆえに、日本には欧州のような世界観の対立がほとんど見られません。たとえば、古代の日本では仏教を奉じる蘇我氏と仏教に反対する物部氏の戦いでしたが、これは世界観をめぐる争いではありませんでした。仏教をめぐる意見の対立は、個人の信仰や世界観の問題ではなく、統治システムとしての国家祭祀をどうするかの問題であり、それはとりもなおさず、政治の実権をめぐる権力闘争に過ぎませんでした。結果、戦いの後、世界観としてはどうなったのかといいますと、聖徳太子（厩戸皇子）の時代には、日本各地で神仏習合という神道と仏教の融合現象が起きたのでした。

日本に根付いた神道と仏教の世界観は、近代科学とも対立を起しませんでした。欧州では人間中心や神中心の世界観があり、それが科学の物質中心の世界観と対立していました。ところが、神道の世界観は自然中心とも呼べるものですし、仏教には宇宙中心の蓮華藏世界観（れんげざう）というものがあって、私たちの住む宇宙である「娑婆」（しゃば）は無数に存在する多層宇宙のほんの端っこに過ぎません。どちらにしても、人間などは始めから脇役であって、近代科学の導入によって人間が疎外

感を感じることはあまりなかったのです。

対立がないということは、² 本当の意味での対話もないということですが、コミュニケーション」の効果に限界をもたらすことになってしまいました。

Y

は、日本における「対話型

日本は明治期に西洋の学問を大量に輸入しました。その際、人文の分野には、あらかじめ和漢の教養が存在したために、受容だけでなく融合も行われ、たとえばそれが近代小説の誕生につながっていきました。一方、理数系の分野の場合、数学では和算の伝統があり、医学では漢方や蘭方の伝統がありましたが、系統的な自然科学は存在していませんでした。おまけに、西洋列強の力の源が近代合理主義に裏打ちされた科学技術であることを、痛感せざるを得ない状況にありました。ゆえに科学の分野では、もっぱら受容のみが行われました。近代科学の受容をまかされた人たちはそれらを必死に吸収しましたが、それ以外の一般市民の科学への関心は低いものでした。ですから、³ 科学者の側も反科学と闘う気構えなど必要ありません。こうして、一般市民の科学への無関心だけでなく、科学者の側の科学コミュニケーションへの無関心が日本に蔓延まんえんしました。

日本における科学コミュニケーションの場合、まずは方法に対する関心を持ってもらうことから始めなければなりません。「科学の内容」のおもしろさや好き嫌い以上に、「方法としての科学」の価値や必要性について共感・共有してもらうことが大切です。それゆえ、「共感・共有型コミュニケーション」が不可欠となるのです。

(岸田一隆『科学コミュニケーション』)

問一 空欄

X

Y

に入れるのに最も適当な語句を、次の各群のアイオの中からそれぞれ

一つずつ選び、記号で答えよ。

X

ア 特殊が存在するがゆえに、普遍性を追求する傾向

イ 反科学が存在するにもかかわらず、科学を追求する傾向

ウ 差異が存在するがゆえに、同化を追求する傾向

エ 対立が存在するがゆえに、多様な個性を追求する傾向

オ 多様性が存在するにもかかわらず、独自性を追求する傾向

Y

ア 「柔よく剛を制す」とする国民性

イ 「持ちつ持たれつ」という国民性

ウ 「和を以て貴しと為す」とする国民性

エ 「寄らば大樹の陰」という国民性

オ 「井の中の蛙大海を知らず」という国民性

問二 傍線部1「この時代、科学の力が過大に評価される一方、科学によって何が起こるかわからないという恐怖心も呼

び起こされました」とあるが、これは「この時代」の「科学」がどのようなものであったからか。九十字以内（句読

点等を含む）で説明せよ。

問三 傍線部2「本当の意味での対話」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 出自や文化が異なる相手であっても、同じ環境の下で共存することで対立軸を超えること。
- イ 人間中心や神中心の世界観が、科学の物質中心の世界観に対して非人間性を訴えて反発すること。
- ウ 対立するもの同士が平和的に共生するために、知性を通じて向き合い差異性を容認すること。
- エ 神道の自然中心の世界観と仏教の宇宙中心の世界観とが、近代科学との対立を通じて融合すること。
- オ 自己と異なるものとの間にも普遍性を見出すことによって、対立そのものを無化すること。

問四 傍線部3「科学者の側も反科学と闘う気構えなど必要ありません」とあるが、その理由として最も適当なものを、

次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 日本では、一般市民の科学への関心が低かったにもかかわらず、西洋列強の力の源泉である科学技術を積極的に受け入れようとしたから。

イ 日本では、近代科学を受容しても、他の外来文化と同様に日本文化と融合させてしまい、一般市民に科学への関心をかき立てなかったから。

ウ 日本には、漢方や蘭方の伝統はあったものの、系統的な自然科学が存在していなかったため、一般市民が科学への関心をもつ機会もなかったから。

エ 日本には、一般市民の科学への無関心に加え、近代科学が前提とする世界観とはつきりと対立するような世界観がなかったから。

オ 日本では、一般市民に対して科学者の側による科学コミュニケーションが不足していたため、一般市民の科学への関心が低かったから。

問五 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 現代に蔓延する科学への怖れや無関心を一般人から拭い去るために、科学の有用性を伝えるコミュニケーションが必要とされる。

イ 十八世紀までは世界の擬人論的な解釈の方が受容されていたが、科学が発達した十九世紀になると世界の物理的な解釈の方が受容されるようになった。

ウ エラズマスがマッドサイエンティストのモデルになったのは、彼が科学者の枠におさまりきらない過剰な才能を持っていたからである。

エ 日本では新来のものを受容しつつ既存のものと融合させる伝統が、一方的な近代科学の受容によって失われてしまった。

オ 日本では、ますます強まる専門家と一般人との間の無関心を解消すべく、文化の型に即した科学コミュニケーションが求められる。

国語の問題は次のページに続く。

三

現・古・漢型

現・古型

次の文章は『うつほ物語』の一節で、右大将藤原兼雅（おとど）が久しく参内しないことについて、帝が、兼雅の兄である右大臣藤原忠雅（右のおとど・おとど）と話している場面である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

夕暮れのほど、内におとど久しく参り給はぬことを、帝、右のおとどにのたまふ、「右大将、久しく参らぬかな」とのたまへば、おとど、「桂川^{かつらがは}わたりに、興あるところを持て侍りたうぶを、そこになむ、花見給へむとて、日ごろ侍りたうぶなり」。帝、「妻なども、いづれをか率てものすらむ」。おとど、「仲忠^{なかつただ}が母をなむ率てまかりける」。上、「それを思ふななり^aな」。おとど、「ただ今、かれ一人をなむ持て侍るなる。本妻^{（注2）}どもみな忘れ侍りて」と奏し給へば、「いと興あることかな^{（注3）}。三の宮を思ひし時も、十七、八人ばかり持てありしを、いかなればただ一人にはなりたらむ。その皇女^{みこ}を忘るばかりの心憎さよ。仲忠が母には、昔より飽かぬことなく聞こえし人ぞかし。いかで見むと思ひしを、参らず^bなりにし人を」とて、上、「なほこの人悩ましに遣らむ」とて、書かせ給ふ。

「A 月にだに寄らずなりにし白雲の谷に年経^ふと聞くはまことか

いと心強げ^cなりしを、いかでかくは」など書き給ひて、右近少将仲頼に、「これ、かの桂の家にもものして、内の方に取らせよ」と仰せ給ふ。仲頼いそぎて出づる一つ車にて、行政、祐澄^{すけすみ}の中將、仲澄^{なかつすみ}の侍従など乗りて、桂へまうで給ふ。

道のほど、遊びて来る音聞こし召して、「侍従^{（注4）}のまかづるにぞあなる。湯漬^{ゆづけ}の設けさせよ」とのたまふほどに、おも

しろき花の枝に御文つけて、使の少将参り給へば、上げたる御簾^{みす}うち下ろして、外に出で給ふ。御達^{（注5）}、みな内に入りぬ。

かくて、簀子^{すのこ}に居ぬ。御供の人は花の陰に据ゑたり。仲頼御文を内に入るれば、おとどいと見まほしく思さるれど、え

入り給はず。北の方、御文を見給ひて笑ひ給ふ。

さて、内よりいとくもの参る。紫檀^{（注6）}の折敷^{しき}、沈^{ちん}の台に据ゑて八つ、机、いとかめしうはあらぬに、乾物^{からもの}、生物^{なまもの}など

して、よきうなゐども、限りなく装束さうぜかせて参らす。御土器度々かはらけになりて、御使の少将いそぎ給ふに、「など、かくはいそぎ給ふ。花を見てこそ帰り給はめ」とて、土器賜ふとて、

B いそぐとも花に任せむにほふ色見つつや人の帰るとも見む

仲頼、「さるは」など言ひて、

C 花の香を尋ねて来つるかひもなくにはひに飽かでわれや帰らむ
かかるほどに、少将、「久しくなりぬ。⁴いとかしこし」とていそげば、北の方、内の御返り、

D 白露の宿るもうれし谷といへど空にし月の影も見ゆれば

と聞こえ給ひて、綾掻練あやかいねりの桂一襲うちきりとかさね、袴具はかましたる女の装束一領さうぜひとくだりかけ給ふ。いそぎ参りぬ。こと人々とどめ給ひて、遊び明かして、つとめて帰り給ふに、同じやうなる女の装束かけ給ふ。

(注)

1 侍りたうぶ……主に男性が用いる改まった慣用的敬語表現。「(うて)おられます」の意。

2 本妻ども……もとからの妻たち。

3 三の宮……帝の妹で、右大将兼雅の妻の一人。後出の「皇女」も同じ。

4 侍従……右大将兼雅の子、仲忠のこと。

5 御達……女房たち。

6 紫檀の折敷、沈の台……「紫檀」は暗紫紅色の堅い木。「折敷」は食器を載せる縁のある四角い盆。「沈」は香木。

7 うなゐ……うなじのあたりで切りそろえた髪型の子ども。

問一 波線部 a i c 「なり」の文法的説明として最も適当なものを、次のア i エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 断定の助動詞 イ 伝聞・推定の助動詞 ウ 動詞 エ 形容動詞の活用語尾

問二 傍線部 1 「いと興あることかな」とあるが、帝はどのようなことを「興あること」と言っているのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 和歌 A は、帝が仲忠の母に送ったものである。「月」「白雲」「谷」は誰をたとえているか。最も適当なものを、次のア i カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 帝 イ おとど（兼雅） ウ 右のおとど（忠雅） エ 仲忠 オ 仲忠が母 カ 三の宮

問四 和歌 A i D の中から、二句切れのものをすべて選び、記号で答えよ。

問五 傍線部 2 「え入り給はず」、3 「いとくもの参る」を、それぞれ現代語訳せよ。

問六 傍線部 4 「久しくなりぬ。いとかしこし」とはどういうことか。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 『うつほ物語』と同じく、『源氏物語』以前に成立した作り物語を、次のア i オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 伊勢物語 イ 平家物語 ウ 狭衣物語 エ 堤中納言物語 オ 竹取物語

国語の問題は次のページに続く。

四 現・古・漢型

次の文章は、北宋の人韓緯に関する話である。これを読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)(配点 五十点)

韓大参憲之第八子司門郎中緯、嘉祐中知潁州。時京西大疫、流殍甚衆。公賑濟有方、郡人賴以全活者多。乃揭榜隣境、論以救恤之意、使來就食。隣郡之民、襁負而至。來者既衆、穀食不足。又聚衆稍多、無寬広之居。或感疫癘、飢病相仍、死者頗衆。韓公亦感疾而亡。

其秋、隣郡士人夢召至陰府、將使治韓司門賑濟獄。士人乞假治後事。及覺得疾、旬日卒。

祖父言、「賑濟雖為政之急務、當量力為之。不必広其声。広其声而実不至、則至者反罹遷徙飢疫之患。是速其死。所以有陰

(注)

○韓大參忠憲——副宰相であつた韓億のこと。忠憲は死後におくられた名。

○司門郎中——官名。

○嘉祐——北宋の年号。

○知・潁州——潁州(地名)の長官である。

○京西——地方の名。潁州はその一部。

○流殍——飢えた流民。

○賑濟——困窮した人民を救済すること。

○郡人——州の住民。郡は、ここでは州の別称。

○榜——立てふだ。

○救恤——被災者を救済すること。

○就食——他の地に移動して食料を得る。

○襁負——赤ん坊を背負う。

○疫癘——流行性の伝染病。

○陰府——冥界。

○遷徙——他の地に移動する。

○陰禍——人に知られていない災い。ここでは冥界で罰が下されること。

(蘇象先「丞相蘇公譚訓」)

問一 傍線部イ「頗」、ロ「雖」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

問二 傍線部 a「賑 済 有 方」、b「旬 日」の意味として最も適當なものを、次の各群のア、イ、オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- a
- ア 救済に全精力をそそぎ
 - イ 救済の方法が多様であり
 - ウ 救済の範囲をあちこちに広げ
 - エ 救済の仕方が適切なものであり
 - オ 救済にあたって一定の基準を設け

- b
- ア 数日後に
 - イ 十日たって
 - ウ 一週間後に
 - エ その日のうちに
 - オ その月のうちに

問三 傍線部 1「郡人頼以全活者多」を、必要な言葉を補ってわかりやすく現代語訳せよ。

問四 傍線部2「將_レ使_レ治_二韓 司 門 賑 濟 獄_一」とはどういうことか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 士人が冥界で韓緯の被災者救済の案件を審理するよう命じられたということ。
- イ 士人が冥界で韓緯の被災者救済の案件について取り調べを受けたということ。
- ウ 士人が韓緯の被災者救済の案件を冥界の役人に命じて審理させたということ。
- エ 韓緯が冥界で被災者救済の案件の弁護をするよう士人に頼んだということ。
- オ 韓緯が自分の被災者救済の案件を冥界の役人に命じて審理させたということ。

問五 傍線部3「当_レ量_レ力 為_レ之_一」を書き下し文に改めよ。

問六 傍線部4「実_レ不_レ至_一」の具体的内容に当たる部分が二箇所ある。それぞれ五字以内で抜き出せ。(返り点・送り仮名は不要。)

問七 傍線部5「所_レ以 有 陰 禍_一」とあるが、「祖父」は韓緯が罰を受けることになった理由についてどう考えているのか。六十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

五

現・古型

【現代文型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

織田作之助の小説言語が、言文一致の流れを汲む標準語ではなく大阪の口語を基盤とした書きことばで、一般性よりもローカル性が際立ったことから、大阪の読者は、生活言語への親近感と生活言語を使用する開き直りへの共感とが交ぜになった感情をかき立てられたにちがいない。それと同時に、この小説内容のローカル性は、これを親密に感じない読者に向けても流通しているのだという想像もかき立てる。他者としての読者が想像され、親密性と他者性の感覚によって、読者との間にも「想像の共同体」は形成されていった。あるいは他の文化圏の読者に見れば、小説の地の文は標準語を基礎にするという

A

を大胆に自然な形で破っていることで、その大胆な自然さの背後には、作品内容から窺^aえるだけではない、濃密な共同体文化が存在することを感受したとも言えよう。しかしそれは、言うまでもなく実体としての大阪ではない。より大阪的な「大阪」という観念であることは断っておかねばならない。

ここで思い出されるのが、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』である。より大阪的な「大阪」を考えるために、サイードの文章を引用しよう。「オリエンタリズムとは、オリエントを扱うための——オリエントについて何かを述べたり、オリエントに関する見解を権威づけたり、オリエントを描写したり、教授したり、またそこに植民したり、統治したりするための——同業組合的制度和みなすことができる。簡単に言えば、オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式^{スタイル}なのである」。ここで述べられているのは、「オリエンタリズム」が作られた概念であり、そこには

B

が絡んでいるということである。サイードは「オリエンタリズム」をミシェル・フーコー

の「言説」^{ディスコース}の概念で捉え、

「言説」^{ディスコース}に籠められた想像力^bがいかに実体を支配したかを問題にするのである。言説概念

が有効であるのは、「大阪」にとっても同じだ。実体としての大阪ではなく、言説としての「大阪」が、人々の意識の

中でむしろ実体を支配してさえいると思われるからである。一九二九年から三二年の大阪を考現学的な緻密な足取りで観察し記録した名著である北尾鐔之助の『近代大阪』は、織田作之助も参照したと思われるテキストであるが、この細密な記述でさえも、大阪の記録であるとともに言説にはかならない。^{ディスクール}

サイドは、西洋が東洋を記述し「オリエンタリズム」を作り上げたことで、西洋が東洋を他者化しその反価値によって逆に西洋も「西洋」として成立したという論述を展開する。この構図を大阪に当て嵌めると、大阪の対立項として東京が思い浮かぶであろう。東京中央が権力を踏まえて大阪を他者化することで、「大阪」が成立するとともに東京も「東京」として再構成されたと援用できそうであるが、このような思考が実際になされた例は多くはないと思われる。東京は大阪を対立項としては必要としなかった。大阪が「東京」の対立項として自ら「大阪」を創造し、言説としての「大阪」を成立させたというのが実際のところであろう。織田作之助も「東京」への対抗意識をしばしば書いているが、実のところ「大阪」ほど「東京」を必要としたところはないのである。なぜ大阪は「大阪」を作らなければならなかったのか。おそらくは、大阪は東京に次ぐ第二の都市ではなく、東京に匹敵する大都だというアイデンティティを欲したからである。豊臣・徳川の争いの後江戸に幕府が開かれたときから、大阪は、政権の存する江戸（東京）とは異なる価値を持つもう一つの大都でなければならなかった。しかし、明治以降、東京の中心化はさらに進んだ。そこで大阪は、「大阪」としての表現を求めたのである。

「東京」を対立項とすることで再構成される「大阪」という思考様式は、一旦他者としての「東京」を潜ることで見出された事柄が内面化したものである。² その一例として関東大震災を挙げることができるだろう。織田作之助は「放浪」や「船場の娘」にも関東大震災をちらと書いているが、^(注)「夫婦善哉」では、蝶子と柳吉に被害はなかったものの被災させている。頑固な父親から金を引き出すのが困難だと悟った柳吉が、東京で掛け金を集金して駆け落ちしようと蝶子を誘う。三百円ほど集まったところで熱海に行き、芸者を上げて散財していたところを震災が襲うのである。大谷晃一『生き愛し

書いた——織田作之助伝』によると、千代と山市席次とらじが駆け落ちした先は「熱海でなくて紀州湯崎だった」というから、行き先を東京と熱海に換え、関東大震災を加えた C には何らかの意図があった。「夫婦善哉」では、「避難列車」で逃げ帰るように帰阪し、蝶子の家族が再会を喜び合ったと書かれている。関東大震災を生死不明、連絡不通などの混乱として導入することで、安全で安心できる「大阪」が強化されたのである。災害を「彼方」かなたの遠景に配置し、「此方」こなたを共同体として機能させ内面化を促したのだ。

しかし、書かれたのが「作者の身内の話」であつては、それだけのことになってしまっただろう。そこに大阪のローカル色が強く裏打ちすることによって、作品の価値が出た。「作者の身内の話」と「大阪の市井dの人のリアルな人生」とでは、小説としての力がまるで違う。作之助の姉タツや千代の生活上の苦勞は、「雨」のお君や「夫婦善哉」の蝶子の苦勞として表象されることで、言語による決定された存在となり、それと生身の生活感情とは決定的に異なるものになる。言語に定着し拡大して流通し共感が広がれば、生身の生活感情と言説ディスクリとの D さえ起こりかねないのである。言説ディスクリとしての「大阪」が実在の大阪であるかのように「誤解」させた織田作之助と「誤解」した読者の「共犯」によつて、「大阪」は大阪以外のどこにもない都市になり、お君や蝶子は「大阪」の女」として、人々の幻想を長く支え続けたのである。むろん織田の小説技術が大阪らしさをヴィヴィッドに描き出したからこそ、読者との「共犯」も生じた。しかし、そこに生まれたのはやはり言説ディスクリの街としての「大阪」であつた。

(佐藤秀明「織田作之助の『大阪』」)

(注) 「夫婦善哉」……一九四〇(昭和十五)年に発表された織田作之助の小説。主人公の蝶子と柳吉のモデルは、織田の姉・千代

とその夫・山市席次だとされている。

問一 傍線部 a i d の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 空欄

A

i

D

を補う語句として最も適当なものを、次のア i エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 権力 イ 転倒 ウ 虚構 エ 規範

問三 傍線部 i 「言説としての『大阪』」が作られたのはなぜか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「その一例として関東大震災を挙げることができよう」とあるが、「織田作之助」の作品中で「関東

大震災」はどのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 関西に向かった小説のモデルとは異なり、登場人物たちを東京に赴かせ被災させることで、大阪の人間にとって東京の世相が疎遠なものでしかないと示唆する役割。

イ 東京で起こった震災という大惨事を登場人物たちに経験させ、そこから安全な関西に帰還させることで、東京とは違う大阪の安寧ぶりを強調する役割。

ウ 登場人物たちが駆け落ちした先で震災にあらうという場面を設定することで、大阪から逃避した主人公たちの不心得を懲らしめ、故郷の良さを知らしめる役割。

エ 大阪から遠い彼方で起こった震災の破局にあえて登場人物たちを遭遇させることで、大阪の人間に潜在する東京に対する憧憬を相対化する役割。

オ 共同体の営みが崩壊している東京を震災によって象徴させることを通じて、東京の対立項である大阪のもつ親しみやすさや安らぎを際立たせる役割。

問五 本文の内容と合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 小説の言語にあえて大阪の口語を採用した結果、織田作之助の作品群は、一つの地域に閉じることのない一般性を獲得することになった。

イ 戦前の大阪の世相を緻密に観察した『近代大阪』は、事実の記述にある種の想像が混じりこんでおり、それがこの名著の一つの傷となっている。

ウ サイドの分析した西洋と東洋のダイナミックな関係は、東京と大阪の关系到重なり合う部分もあるが、両者には見逃せない差異も存在する。

エ 織田作之助が大阪を舞台とする小説を書き始める決意をしたのは、東京の成立には大阪という存在が不可欠だったからである。

オ 読者が求める大阪のイメージに迎合し、織田作之助がそれをすぐれた小説技術で再構築することで、作者と読者の共犯関係が成立した。

カ 織田作之助の作品に描かれた大阪は、実体としての大阪ではなく、それとは無関係に作家の頭の中で作り上げられた存在である。

問六 波線部について、「言文一致」体の作品(X)とその作者(Y)を、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X ア たけくらべ イ 五重塔 ウ 舞姫 エ 浮雲 オ 当世書生氣質^{かたぎ}

Y ア 幸田露伴 イ 二葉亭四迷 ウ 森鷗外 エ 坪内逍遙 オ 樋口一葉

